

「アブラハムとダビデの場合」

2018年09月07日

ローマの信徒への手紙 4章1節～8節 では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょうか。もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています。しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。同じようにダビデも、行いによらずに神から義と認められた人の幸いを、次のようにたたえています。

「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、／幸いである。主から罪があると見なされない人は、／幸いである。」

パウロは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、神からの義に与る信仰、「信仰による義」を力説した。パウロはユダヤ教ファリサイ派の学徒として、律法厳守によって義に到達できると信じ、ひたすら修行していた。そのパウロは、復活したイエス・キリストに出会い、罪の赦しを知り、死を超えた神の永遠の命を体験した時、律法は罪の自覚を生じさせるが、義には到達できない。ただ、信仰によって、無償で義に与る恵みを知った。これが、パウロの宗教観をひっくり返す、福音の喜びであった。

パウロは、イエス・キリストを信じる信仰によって与えられる「神の義」が啓示された福音宣教に全力を注いだ。そこで、イスラエル人が最も尊敬するアブラハムとダビデの場合はどうだったのかと論を進めている。アブラハムは神の召しを受け、流浪する苦難の中で、神への一途な信仰を確立したイスラエル民族の祖と言われる人である。イスラエル人はアブラハムを「信仰の父」と呼び、彼の子孫であることを誇った。そのアブラハムは何を得たか。もし、行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前では誇ることはできない。聖書には、「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」と書かれている。創世記15章5節、6節に「主は彼（アブラハム）を外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と、行いとは関係なく、神の言葉を信じた彼の信仰を神は「義」と認められたと書いている。働く者への報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものであるが、「不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。」不信心な者をも義とする神を信じる人は、働きがなくても、その信仰によって義とされる。パウロは、こんな嬉しいことが、アブラハムにおいても起こったと言っている。

ダビデも行いによらず、信仰によって義とされる幸いをくださる神を称えている。ダビデはイスラエルを強大な国家へと導いた王として、民衆から絶大な尊敬を集め、メシアはダビデ家から出ると言われるほどであった。ダビデの詩とされている詩編32編1節、2節で、「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、／幸いである。主から罪があると見なされない人は、／幸いである」と歌っている。ダビデも背きを赦され、罪を覆っていただき、神から罪はないと見なされた者は幸いであると、信仰による赦しの恵みを感謝している。パウロは、イエス・キリストが遣わされる前のアブラハムもダビデも行いではなく、信仰によって義とされたと注解している。